

0755

2

参

考

資

料

1688

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp>

第二表 内地産業別有煙炭需要増加率調 (單位千噸)

業別	年次					
	昭和八年	九年	十年	十一年	十二年	
重工業	四七一〇	五八〇四 (二三三)	六一七六 (六・四)	七二九七 (二八・一)	八二四〇 (一一・六)	一四・九
窯業	二八七一	三〇五〇 (六・三)	三三九二 (一一・三)	三六二七 (六・九)	三九三〇 (八・四)	八・二
電氣業	一八八二	二五五六 (三二・八)	二九九四 (七・一)	三二二二 (一七・三)	三七四〇 (一六・四)	一八・四
瓦斯 コークス業	一八八一	一九〇〇 (一・〇)	一九四三 (二・三)	二一六七 (一・五)	二三六〇 (八・九)	五・九
紡織工業	三二七四	三五八九 (九・六)	三三九六 (五・四)	三八四八 (一・三)	三七八〇 (一・八)	三・九
化學工業	二六七七	三四四七 (二・〇)	三九七七 (一五・七)	五三八五 (三・四)	六六一〇 (三・〇)	二五・二
食料品工業	二〇九八	二一三八 (三・三)	二〇三七 (六・〇)	二二三八 (九・八)	二〇八〇 (六・七)	〇・一
官業	七七六	八三〇六 (三・九)	八七一 (八・七)	八二六 (五・二)	一〇七〇 (三・〇)	九・四

註 昭和石炭會社調査
 活孤内ハ増加率。(一)印ハ減少率。

合計	内船炭料	陸上需要計	雑 炭	鉄 道
三〇八〇七	三三七五	二七四三二	三八五九	三四〇八
三四四一三 (一・一八)	三五六一 (五・五)	三〇八七六 (一・二六)	三九二九 (二・六)	三五九七 (五・七)
三六一四三 (四・九)	三六六一 (二・八)	三二四七三 (五・三)	(一)三九三三 (〇・三)	三七四九 (四・二)
四〇七二九 (一・八)	三八四九 (五・二)	三六九三七 (二・七)	四三九五 (一・五)	四〇二七 (七・四)
四四一〇〇 (二・一)	四〇一〇 (四・三)	四〇一〇〇 (八・六)	(一)四二六〇 (一・三)	四一三〇 (二・五)
九・四	四・四	一〇・〇	二・六	四・九

第三表 内地産業別有煙炭需要豫想（單位千噸）

業別	昭和		十三年度	十四年度	十五年度	十六年度
	十二年度	十一年度				
重工業	八一四〇	九三三三	一〇七四六	一二三四八	一四一八八	
窯業	三九三〇	四二五二	四六〇一	四九七八	五三八六	
電氣業	三七四〇	四四二六	五二四三	六二〇八	七三五〇	
瓦斯工業	二三六〇	二四九九	二六四七	二八〇三	二九六八	
紡織工業	三七八〇	三九二七	四〇八一	四二四〇	四四〇五	
化學工業	六六一〇	八二七六	一〇三六二	一二九七三	一六二四二	
食品工業	二〇八〇	二〇八三	二〇八五	二〇八七	二〇八九	
官業	一〇七〇	一〇七一	一〇八五	一〇八七	一〇八九	
鐵道業	四一三〇	四三三二	四五四一	四七七一	五〇三二	
雜業	四二六〇	四三七二	四四八四	四六七一	四八二二	
陸上需要計	四一〇〇	四四九〇	五〇七五	五六四七	六三八三	
内船燃料	四一〇〇	四一八六	四三七五	四五六三	四七六四	
合計	四一〇〇	四八七六	五四四六	六〇七〇	六八四七	

註(1) 昭和十二年度ハ昭和石炭會社調査実績
 (2) 推算ノ基礎ハ昭和八年乃至昭和十二年ノ平均増加率ヲ昭和十二年度実績ニ乘シテ出セルモノナリ。

第四表 内地無煙炭需要調（單位千噸）

年次	昭和八年	九年	十年	十一年
需要量	一六五二	一九〇六	二二〇〇	二六〇〇
増加率		一・二	一・一	一・一

註 昭和石炭會社調査ニ依ル。

第五表 内地無煙炭需要豫想（單位千吨）

昭和十一年	二六〇〇
十二年	二八六〇
十三年	三一四六
十四年	三四六一
十五年	三八〇七
十六年	四一八八

註(1) 昭和十一年度ハ昭和石炭會社調査実績

(2) 推算ノ基礎ハ昭和八年乃至昭和十一年ノ平均増加率ヲ昭和十一年度ノ実績ニ乘シテ出セルモノナリ。

第六表 外地石炭需要調（單位千噸）

	昭和七年	八年	九年	十年	十一年	平均增加率%
朝鮮	一五五三	一八九八 (三三・三)	二二〇七 (二一・五)	二七〇六 (二七・三)	三二二二 (一九・二)	(二〇・〇)
台灣	一七七五	二二五一 (六・五)	一三〇三 (四・三)	一四七七 (一三・四)	一五二四 (三・三)	(六・八)
南洋 羣島	六一七	一七二八 (二・八)	一八二二 (一・二)	一九六二 (一七・六)	一〇五三 (九・五)	(二四・四)
合計	三三四五	三八七八 (一五・九)	四四三二 (四・三)	五二四一 (一六・五)	五七九九 (一三・七)	(二四・八)

註(1) 本表ハ朝鮮總督府殖産局鑛山課、台灣總督府殖産局鑛務課、
太廳殖産部鑛務課ノ調査ヨリ作成。

(2) 括弧内ハ增加率。

第七表 外地石炭需要豫想（單位千噸）

	昭和十一年 (実績)	十二年	十三年	十四年	十五年	十六年
朝鮮	三二二二	三八六六	四六四〇	五五六八	六六八一	八〇一七
台湾	一五二四	一六二八	一七三八	一八五六	一九八二	二二一七
南洋太	一〇五三	一二〇五	一三七八	一五七七	一八〇四	二〇六三
合計	五七九九	六六五七	七六四二	八七七二	一〇〇七一	一、一五六一

註、推算ノ基礎ハ昭和七年乃至昭和十一年ノ平均増加率ヲ昭和十二年度ノ実績ニ乗シテ出セルモノナリ。

註、企畫院調査ニ依ル

第九表 石炭用途別需要額（單位千噸）

用途	昭和十三年	十四年	十五年	十六年
製鉄業	九三三五	一、一六三四	一、四三四三	一、六九〇五
化學工業	九二一三	九九五〇	一、〇六三五	一、一三二五
内船燃料	四九三〇	五二〇八	五、四七九	五、七二五
電氣業	六〇六五	六、五二〇	六、九九六	七、八九六
鉄道	五、六七〇	六、二五二	七、〇三四	八、〇四六
窯業	五、一〇二	五、四六九	五、九二四	六、三一五
紡織業	四、一八三	四、六三五	四、八九〇	五、〇八五
燧、煤、浴	六、三八四	六、五五七	六、七五七	六、九四三
山元消費	四、〇七二	四、五〇五	五、〇〇九	五、四三七
瓦斯	二、八三二	三、九三八	三、〇六八	三、一八六
食品工業	二、五二七	二、六八〇	二、八一四	二、九五七
人造石油	七、七〇	二、二五〇	三、五四〇	四、二九〇
其他	三、九一〇	四、四七二	五、五一七	六、六二二
合計	六、四九九三	七、三〇七〇	八、二〇〇六	九、〇七三二

第十表 本邦石炭生産豫想

(A)表 本邦石炭生産豫想(單位千噸)

年次	生産量
昭和十三年	五三〇七六 (BA 四 三九〇〇〇〇二
十四年	六二一五七 (BA 五 七三二八九六一
十五年	六八〇一六 (BA 一五 二七五四七四三三
十六年	七五八七三 (BA 一六 三六九九〇七三〇

註(1) A 既發炭田、B 新開炭田

(2) 右数字ハ先ニ本會立案ノ国防産業生産力擴充五ヶ年計畫ノ石炭

供給数字ナリ

(3) 擴充計畫實施後最近ニ於ケル現状ノママ推移セル時ノ見込数字
ハ附表ニ掲ケタリ

口、無煙炭

(單位千噸)

昭和十三年	十四年	十五年	十六年
二九七六	三四〇七	三九一六	四五〇三
(A)	(A)	(A)	(A)
一九〇七	二一九一	二五三三	三〇〇〇
(B)	(B)	(B)	(B)
九〇二	一六一	三三三	三〇三

(B)表 内外地石炭生産高豫想 (單位千噸)

昭和十三年	十四年	十五年	十六年	十七年
五五九五〇	六〇一〇〇	六五三三〇	七三三〇〇	七七六〇〇

イ、九州炭		ロ、北海道炭		一内 地	
昭和十三年	二七七〇〇	昭和十三年	一三〇〇〇	昭和十三年	四七〇〇〇
十四年	二八五〇〇	十四年	三〇〇〇〇	十四年	四九六〇〇
十五年	二九三〇〇	十五年	三〇〇〇〇	十五年	五三一〇〇
十六年	三〇〇〇〇	十六年	三〇〇〇〇	十六年	五八六〇〇
十七年	三〇〇〇〇	十七年	三〇〇〇〇	十七年	六一〇〇〇

二、山口炭其他					八、常磐炭				
昭和十三年	昭和十四年	昭和十五年	昭和十六年	昭和十七年	昭和十三年	昭和十四年	昭和十五年	昭和十六年	昭和十七年
三〇〇〇	三二〇〇	三六〇〇	四二〇〇	四六〇〇	三三〇〇	三七〇〇	四二〇〇	四九〇〇	二〇〇〇

四 朝 鮮		三 南 洋 太					二 台 湾				
昭 和 十 三 年	十 四 年	昭 和 十 三 年	十 四 年	十 五 年	十 六 年	十 七 年	昭 和 十 三 年	十 四 年	十 五 年	十 六 年	十 七 年
三 五 〇 〇	四 二 〇 〇	三 五 〇 〇	四 三 〇 〇	五 一 〇 〇	六 五 〇 〇	七 五 〇 〇	一 九 三 〇	二 〇 〇 〇	二 二 五 〇	二 六 〇 〇	二 七 〇 〇

昭和十五年

四九〇〇

十六年

五八〇〇

十七年

六四〇〇

註(1)以上本會調査「国防産業擴充五ヶ年計畫遂行見込表」(昭和十

三年八月)ニ依ル

(2)以上ノ数字ハ現在ノ進行狀態ノママ特別ノ政策ヲ加ヘス推移セ

ル時ノ見込量ナリ。

第一一表 石炭品種別生産額（企畫院調査）
イ、瀝青炭

通 計	滿 洲	日 本			地 域	
		計	樺 太 太 灣	朝 鮮		内 地
七 六 四 六 四	一 七 一 六 八	五 九 二 九 六	三 七 三 五	一 九 五 〇	五 一 八 八 四	昭 和 十 三 年
八 七 四 〇 三	二 一 二 六 〇	六 六 一 四 三	五 二 四 五	二 〇 〇 〇	五 六 九 二 六	十 四 年
一 〇 〇 〇 一 〇	二 五 九 一 〇	七 四 一 〇 〇	六 五 九 五	二 一 五 〇	六 二 九 九 〇	十 五 年
一 一 一 四 二 一	三 〇 七 一 〇	八 〇 七 一 一	七 五 五 五	二 三 〇 〇	六 八 二 八 六	十 六 年

（單位千應）

通 計	滿 洲	日 本				地 域
		計	樺 太	台 灣	朝 鮮 內 地	
三三一九	二八〇	三〇三九	—	—	一九一九	昭和十三年
三九四九	二九〇	三六五九	—	—	一九五〇	十四年
四八一九	三五〇	四四六九	—	—	一九七九	十五年
五八〇五	四〇〇	五四〇五	—	—	一九八五	十六年

口、無煙炭

(單位千廳)

附 内地地方別出産見込額

計	地方別			
	九州	北海道	常磐	字部
五五〇〇四	三二六四一	一三五九六	三四九二	三一七四
五八〇七六	三四八五七	一五九三八	三八四二	三三三〇
六四一八〇	三七七三七	一八六八五	四二二二	三四二〇
六九五〇六	三九三二〇	二二〇四五	四五一八	三五〇〇
				一一六
				一一三
				一〇一
				一〇九

(單位千匁)

註(1)のハ輸出、輸入額夫々ニ對スル百分比
 (2)石炭聯合會調査ニ依ル

差引入超	輸 入						輸 出					
	合 計	關 東 州 其 他	露 領 亞 細 亞	佛 領 印 度 支 那	中 華 民 国	滿 洲 国	合 計	其 他	比 律 賓	海 峽 植 民 地	香 港	中 華 民 国
一三二八	二七二五	一	一一五	三五四	四二三	一八二一	一三八七	一二四	一五六	二一五	四三一	四六〇
	一〇〇	一	四	一三	一五	六七	一〇〇	九	一一	一六	三一	三三
一九三五	三四九五	二	一七四	四七〇	三六五	二四八二	一五六〇	六一	一六三	二二二	五五七	五五五
	一〇〇	一	五	一四	一〇	七一	一〇〇	四	一〇	一四	三六	三六
二九七三	四〇六〇	三	二〇一	五四九	五五一	二七五四	一〇八七	六二	一五一	二三七	三七九	二五六
	一〇〇	一	四	一四	一四	六八	一〇〇	五	一四	二二	三五	二四
三〇二九	四〇四八	一	四六	七四八	五五八	二六九二	一〇一八	四〇	一八九	二一六	四二三	一四九
	一〇〇	一	一	一八	一四	六七	一〇〇	三	一九	二一	四二	一五
三〇七六	四一八八	四	五	八八三	一〇二二	二二七二	一〇一一	二四	二七二	二七四	四三一	一〇八
	一〇〇	一	一	二一	二四	五四	一〇〇	二	二四	二四	三八	九
三三九八	四四二六	六	三	八三二	一三〇七	二二七七	一〇二八	二五	二五〇	三二七	三九〇	三三
	一〇〇	一	一	一九	三〇	五一	一〇〇	二	二四	三三	三八	三

第一二表 最近六ヶ年間石炭国別輸出入高(單位千噸)

第一三表 (A) 表

本邦石炭需給豫想（單位千噸）

年次	需給	
	需	要
昭和十三年	六〇一	二四
十四年	六七四	八九
十五年	七五四	二九
十六年	八五八	〇六
年次	供給	
	生	産
昭和十三年	五三〇	七六
十四年	六一一	五七
十五年	六八〇	一六
十六年	七五八	七三
年次	輸給	
	輸	入
昭和十三年	七〇四	八
十四年	六三三	二
十五年	七四一	三
十六年	九九三	三

註、生産額ハ本會立案石炭生産力擴充計畫ノ數字ナリ。現状ノママ
特別ノ政策ヲ施ササレハ昭和十六年度ニ於テハ所期ノ生産量ヲ
得難シ

註、本表生産量ハ特別ノ政策ヲ加ヘス現状ノママニテ推移セル時ノ
豫想ナリ

年次	需給	
	需	給
昭和十三年	六〇一・二四	五五九・五〇
十四年	六七四・八九	六〇一・〇〇
十五年	七五四・二九	六五三・五〇
十六年	八五八・〇六	七三五・〇〇
		輸入
		四一・七四
		七三・八九
		一〇〇・七九
		一三三・〇六

(B) 表

(單位千噸)

第一四表 滿洲石炭人造石油開發計畫表

資源名	單位	當 初 計 畫			第一年度 生產実績	修正計畫五箇 年後生產目標
		五箇年后 生產目標	康德三年末 現在能力	第一年度 生產目標		
石 炭	千 噸	二七一六〇	一三三三〇	一三六二〇	一四六四八	對日(六〇〇〇) 三三九一〇
滿炭關係	、	一五〇〇〇	二五一一〇	三九〇〇	二七四〇	一八〇五〇
滿鐵關係	、	一〇六六〇	一〇三三八	一七〇五〇	一〇五七〇	一〇三六〇
本 溪 湖	、	一五〇〇	七〇〇	七〇〇	七六八	二七〇〇
其 他	、				五七〇	三八〇〇
石炭液化	、	八〇〇				一七二〇

註 滿洲国政府滿洲産業開發五年計畫概括表（康德五年五月）ニ依ル。

第一五表 昭和十六年度滿洲石炭需給豫想

需 要	二、三八三〇（千噸）
供 給	三、四九一〇（、、）
輸 出	一、二三〇〇（、、）
余 剩	七、八〇〇（、、）

註、推算ノ基礎次ノ如シ

(1) 需 要 量

滿洲国政府發表ノ新五ヶ年計畫ニ依ル生産数量（三、四九一〇千噸）、但シ對日輸出六〇〇千噸）ヨリ對日輸出量ヲ除キ、更ニ人造石油工業遂行見込ハ計畫（一、七五〇千噸）ノ二割可能ト見積リ、其ノ余額分ヲ差引ケルモノヲ需要量ト看做セリ。

(2) 供 給 量

新五ヶ年計畫ノ目標（三、四九一〇千噸）ニ對シ過去ノ実績及ヒ最近ノ調査ニ基ク埋藏量百二十億噸ヲ下ラサル巨大ナル数量ヨリ

リ此ノ目標實現ハ可能ナリト認ム。

(3) 輸出量

本邦ノ不足額ハ滿洲炭ヲ以テ補ハントスルモノナリ

(4) 余剰分

余剰分ハ貯炭、對外輸出ニ振向ケ、又ハ産業擴充計畫進展ニ伴フ需要量増大ニ當リテ之ニ差向ケルモノトス。

第一六表 滿洲石炭年度別產出高表

昭和元年 八三三万廳

二年 九五一〇

三年 一〇二一〇

四年 一〇五三〇

五年 九八六〇

六年 九二〇〇

七年 七七四〇

八年 一〇一五〇

九年 一〇四二〇

十年 一〇八二〇

十一年 一三六〇〇

十二年 一四二〇〇

十三年(豫想) 一七五六〇

註、日滿商事會社調査ニ依ル

第一七表 滿洲炭礦別出炭高表

(1) 滿洲炭礦係

(2) 滿洲炭礦係

復州	八道壕	阜新	北票	西北安	計	老頭溝	蛟河	瓦房店	煙臺	撫順	昭和十二年度	十三年度(豫想)	增加
一三	七	三二	三五	七八	一〇三四	一〇	三一	五	三五	九五三	九八〇	二七	萬噸
一五	五	九〇	六〇	一〇	一〇六八	一	三五	五	三六	九八〇	九八〇	二七	萬噸
二	二	八	五	二	三四	一	四	一	一	二七	二七	二七	萬噸

註、日滿商事會社調査ニ依ル	(8)												
	合 計	本 溪 湖	牛 心 臺	穆 稜	計	舒 蘭	田 師 付	通 化	和 龍	火 石 嶺	札 賚 諾 爾	鶴 立 崗	密 山
一四二〇	一 二 七	七 八	一 二	三 七	二 五 九	一	一	一	一	一 八	一 五	四 六	一 五
一七五六	一 五 一	九 〇	一 八	四 三	五 三 七	五	三	六	五	二 五	二 三	六 一	二 七
三三六	二 四	一 二	六 六	六 六	二 七 八	五	三	六	五	一 七	八 五	一 五	二

第一八表 滿洲石炭需要別數量

昭和七年	四六九	七八	三三五	八八一
八年	六一一	八七	三七六	一〇七四
九年	七二五	八六	三九〇	一二〇一
十年	八六九	八八	三三五	一二三三
十一年	九五八	八五	二九九	一三四二
十二年	一〇四	八〇	二六二	一三四六
十三年(豫想)	一三六三	八〇	三四三	一七八六
	滿洲内	船燃料	輸出	合計

註、日滿商事會社調査ニ依ル

註、日滿商事會社調査ニ依ル

合 計	採 煖 雜 用	山 元 消 費	其 他 工 業	食 料 品	織 維 業	窯 業	化 學	鉄 工 機 械	瓦 斯	電 氣	製 鉄	鉄 道
七 二 五	二 〇 五	四 一 七	一 九	六 〇	四 一 六	一 〇	一 〇	一 〇	五 五	一 一 三	一 一 五	一 一 八
八 六 九	二 四 五	四 四 八	二 一 一	一 六	五 一 五	二 〇	一 五	一 〇	五 三	一 二 九	一 四 九	一 一 八
九 五 八	二 六 〇	五 一 四	二 一 一	一 七	五 六 〇	三 〇	一 三	一 六	六 五	一 二 三	一 六 三	二 〇 四
一 〇 四	三 〇 二	八 六 七	二 七	九	六 〇	四 〇	二 八	一 七	三 〇	一 三 四	一 八 四	二 〇 四
一 三 六 三	三 四 二	一 〇 六	三 三 八	一 二	七 一 一	四 二	三 八	三 四	九 五	一 六 五	二 六 三	二 四 三

第一九表 滿洲内石炭需要用途別数量(万噸)

第二〇表 滿洲炭輸出内譯表

年次	日本	朝鮮	海外	計
昭和九年	二九六万噸	四七万噸	四七万噸	三九〇万噸
十年	二五三万噸	五八万噸	二五万噸	三三六万噸
十一年	二二四万噸	五七万噸	一八万噸	二九九万噸
十二年	一九五万噸	六〇万噸	七万噸	二六二万噸
十三年豫想	二七五万噸	六五万噸	三万噸	三四三万噸

註、日滿商事會社調査ニ依ル

第二一表 滿洲炭礦昭和十三年度輸出豫想

合 計	撫 順	本 溪 湖	北 票	阜 新	密 山	復 州	牛 心 臺
二七五	一八五	二二	二	三	二	一〇	五
六五	五七	八					
三	三						
三四三	二四五	一〇	二	三	二	一〇	五

註、日滿商事會社調査ニ依ル

第二二表 滿洲炭礦別需要別數量表（昭和十一年度）（單位千噸）

需要別百分比%	滿洲鐵關係		滿洲炭關係								滿洲鐵關係											
	瓦房店	老頭兒溝	蛟河	煙台	撫順	復州	八道	早新	密山	札諾爾	鶴立	西安	北票	火石嶺	小計	本溪湖	牛心台	牛心台	其	他	小計	總計
一般地質	三九一七	一五八六	一〇〇六	二〇〇八	三二五九	三三六六	四三六六	二四六六	二四六六	八二六一	三三六一	三三六一	一三六六	一六六六	一六六六	四二八	九三二	一四三二	一四三二	二九四四	二九四四	四〇〇七
鐵道	一〇八	二〇	七九	四一	九六八	一〇	一〇	一〇	一〇	二〇七	五〇〇	四三〇	四三〇	七三	三	一	一	一	一	一	一	一五二
製鉄	一一二	一	一	四九	一〇七三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	五〇九	一	一	一	一	一	一六三一
山元消費	三〇〇	一六	三九	一三	二四二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	三五	一	一	一	一	一	四九二
輸出	二七〇九	一	一	二	二七〇七	一〇四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	九七	一	一	一	一	一	二九三
船焚	八五一	一	一	一	八五一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	八五一
合計	一〇〇〇	一八二	二五	九三〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	七〇一	九三	二七	一四	一四	一	一〇〇〇

第二三表 滿洲石炭埋藏量調査 (單位千噸)

炭坑名	滿鐵調	滿洲國調	滿炭調
撫順	九五〇〇〇〇	九五〇〇〇〇	九五〇〇〇〇
煙臺	四〇〇〇〇〇	四〇〇〇〇〇	四〇〇〇〇〇
瓦房店 (炸子窰)	七〇〇〇〇	七〇〇〇〇	四〇〇〇〇〇
蛟河	一、二、五〇〇	四、五、六〇〇	一〇、二、〇〇〇
老頭兒溝	一、六〇〇〇	一、六〇〇〇	一〇、二、〇〇〇
復州 (五嘴背)	二〇〇〇〇	一、六〇〇〇	一、四〇〇〇
八道壕	二〇〇〇〇	二〇〇〇〇	二〇〇〇〇
阜新	四〇〇〇〇	四〇〇〇〇	四〇〇〇〇
密山	三〇〇〇〇	二、一、〇〇〇	二〇〇〇〇
札賚諾爾	四〇〇〇〇	二、〇〇〇〇	二〇〇〇〇
鶴立崗	六〇〇〇〇	一、五〇〇〇	三、四、〇〇〇
西安	六〇〇〇〇	二、八〇〇〇	二、八、〇〇〇
北票	三〇〇〇〇	二、五〇〇〇	二、五、〇〇〇
尾山	四、五、〇〇〇	七、〇〇〇〇	二、五、〇〇〇
和龍	一〇〇〇〇〇	五、〇〇〇〇	八、〇〇〇〇

註、滿洲炭礦會社最近ノ調査ニ依レハ滿洲石炭埋藏量ハ既開發炭礦
分ノシニテ百二十億噸ヲ下ラス、現在調査中ノモノヲ入ルレハ
夥シキ數量ニ上ルト云フ。

十大分	通化(鉄廠)	舒蘭(缸窰)	田師付	火石嶺	本溪湖	牛心臺	穆稜	合計
四、五〇〇〇	四、八〇〇〇	四〇〇〇〇	六〇〇〇〇	一、五〇〇〇	二、二〇〇〇	一、一〇〇〇	三、〇〇〇〇	四、一九六、七〇〇
一、六〇〇〇	六、〇〇〇〇	二、五〇〇〇	一、二〇〇〇	三、六〇〇〇	二、二〇〇〇	一、五〇〇〇	七、五〇〇〇	二、八三一、〇〇〇
三、〇〇〇〇	一、一〇〇〇	一、一〇〇〇	五、七〇〇〇	二、二〇〇〇	二、二〇〇〇			七、二八九、四〇〇

第二四表 本邦石炭生産力擴充計畫

昭和十三年三月一日 生産力擴充計畫大綱
 企畫院 生産力擴充委員會

第一方 針

一 昭和十六年ニ於ケル石炭生産目標ハ日滿ヲ通シ左記ニ依ル

日本 八六〇〇〇千噸

滿洲 二七〇〇〇

計 一一三〇〇〇

ニ 有時ニ於ケル石炭需要増加ニ對シテハ供給余剩力及消費規正ニ依リ之ヲ充足スルモノトス

三 昭和十六年ニ於ケル石炭ノ需給ハ日、滿、北支ヲ通シ自給自足ヲ目途トシ海外ヨリノ輸入ハ概ネ左記限度ニ止ムルモノトス

佛領印度支那 一〇〇〇千噸

北樺太 三〇〇

計 一三〇〇

第三擴充目標

種別	生産目標			現在能力			要擴充能力			輸入量
	日	滿	計	日	滿	計	日	滿	計	
瀝青炭	八〇六〇〇	二七〇〇〇	一〇七六〇〇	二二八〇〇	一四〇〇〇	六六八〇〇	二七八〇〇	一三〇〇〇	四〇八〇〇	五四〇〇
無煙炭	五四〇〇	—	五四〇〇	二二〇〇	—	二二〇〇	三二〇〇	—	三二〇〇	一〇〇〇
計	八六〇〇〇	二七〇〇〇	一一三〇〇〇	五五〇〇〇	一四〇〇〇	六九〇〇〇	三二〇〇〇	一三〇〇〇	四四〇〇〇	六四〇〇

備考

- 一 現在能力ハ昭和十二年ノ推定生産ニヨリ算定ス
- 二 輸入量ハ昭和十六年ニ於ケル日滿プロツク以外ヨリノ輸入トス
 (北支ヨリノ輸入、五二〇〇千噸ヲ含ム)
- 三 製鉄用粘結炭ハ瀝青炭中ニ含ムモノトス
- 四 滿洲国ノ生産ハ全部瀝青炭ト假定ス